

症例 Case 15-2003, NEJM 348;20

精巣セミノーマ治療の 5 年後、緩徐に増悪・改善を繰り返す肺結節影をきたした 47 歳男性

A 47-year-old man with waxing and waning pulmonary nodules five years after treatment for testicular seminoma.

## 【Problem List】

- #1 両肺異常陰影** “診断的手技”の18か月前、セミノーマ術後3年半後ごろに初めて指摘された。現在は呼吸器系の自覚障害はない。結節は多発性であり、胸膜下・下葉に集中する傾向がある。月単位で出現・拡大・軽減・消失を繰り返す。
- #1-1 左下肺の大結節影** 術後3年半後頃より出現した、今回の症例の多発結節では最大のもの。CXRでも見ることができた。発見当時2.8×2.2cmのすりガラス状陰影で、境界は不整、かつ高吸収像となっている。空洞の形成(-)、腹水(-)。
- 数日後のCT、3週間後のCTではそれぞれ径は拡大し、同時に薄い陰影となっていった(fading(+))。
- #2 乾性咳嗽** 放射線照射の1年後より出現し、その後持続した。
- #3 胃食道逆流症** 反復する胸焼けの症状があり、重度の胃食道逆流が指摘されている。
- #4 セミノーマ術後状態** 5年前に指摘されており、拡大精巣摘出術を施行済。自覚症状は特になかった。
- #4-1 放射線照射後** 術後に、腹腔リンパ節、傍大静脈リンパ節、膨大動脈リンパ節に放射線照射、合計照射量は30Gyに達した。照射時には吐き気・胸焼けが出現したが、プロクロルペラジン・制酸剤にてコントロールされていた。
- #4-2 再発・転移のリスク状態** 術後断端(-)、副睾丸・精索に腫瘍(-)であった。肺野病変は転移性・原発性の肺腫瘍に矛盾しない所見である。肺門部リンパ節腫大(-)。体重減少(-)。
- #5 非特異性の心全壁胸膜肥厚** セミノーマの診断時から指摘されている。
- #6 両下肢浮腫の既往** 術後33か月後、両下肢の浮腫(++)であり、1年以上持続した。エコーで深部静脈血栓症(-)、肺換気血流不均等(-)。その他理学所見上、異常を認めず。転帰不明。
- #7 労作時呼吸困難感の既往** 術後33か月後に出現した。転帰不明(比較的速やかに改善か)。
- #8 皮膚膿疱疹の既往** 術後3年半後頃に出現、圧痛(+)、自発痛(±)。帯状疱疹<sup>S/O</sup>にてアシクロビルが処方されたが、数週間で軽快した。